

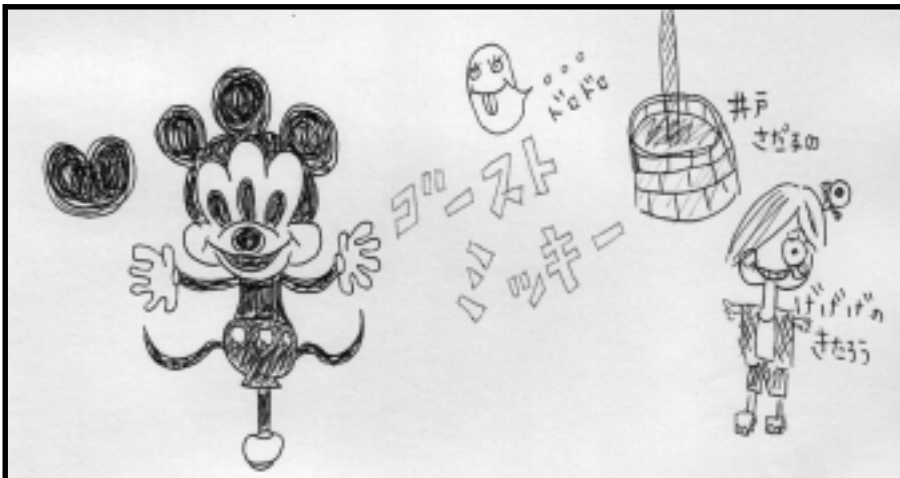


Title	死と生について考える
Author(s)	スラヴィアンスカ, リュドミラ; 会沢, 久仁子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 40-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



十二月二十六日(火)
担当 ルーシー
あいごわ
テーマ
死と生について
考える

死と生について考える

リュドミラ・スラヴィアンスカ+会沢久仁子

高校生とともに死と生について考えてみたいと、臨床哲学の留学生で安楽死を研究するルーシーさんと会沢とで二回の授業を持った。第一回目は、最初の時間にルーシーさんが生徒たちに彼らの死生観についてアンケートし、ルーシーさんと生徒たち、そして生徒たち同士の交流と意見交換を図った。次の時間には会沢が関心を持っているホスピスについて紹介した。第二回目には、自分の死を疑似体験するワークを行い、各自のワークを振り返って感想を述べてもらった。また遺された人の悲しみについても少し触れた。



	あるかどうかはわかりません ghosts	
N.O. 		

11.26.2002

五時間目 ルーシー

On the 26 of November I visited Fukui High School and spoke with the students about the problems of death and related topics. I was very impressed by this visit because nobody had made a survey about the way young people think about death.

My doctoral thesis concerns the problems of euthanasia, so I was interested in the way different generations think about them and death in general. I made a questionnaire and asked the pupils to answer questions like:

1. Do you believe in God?
2. Do you have a religion?
3. Do you believe in life after death?
4. What is scary in death?
5. Do you believe in ghosts?
6. If you had the choice, would you prefer to live a longer, but "healthy" life, or a shorter, but more excited and pleasant life?
7. Are people, who commit suicides brave, or cowards?

Q
UESTIONS
from
LUSY

The questionnaire was in English and most of the students also answered in English. I was not very surprised by their answers. My impression that young people in Japan are mainly atheists was confirmed by the results of this questionnaire. None of the students declared that he/she has a religion and nobody believed in God. The same applied to life after death. But some of the pupils drew pictures of ghosts and said they believe in ghosts. It seemed they really enjoyed drawing as a way to express their views and thoughts.

The majority of the class declared that a shorter, but more pleasant and excited life is to be preferred than a longer life in which you have to abstain from plenty of "unhealthy pleasures".

Whether suicide is an act of braveness or cowardice - most of the answers were: people, who commit suicide, are cowards. Few pupils said that suicide in general is a result of fear of life and facing the reality, but courage is needed for the very act of suicide.

After the students finished writing we discussed all the questions, although I had to force them to speak. I feel that in Japanese school system students are not initiative to express their own opinions and to be active during the classes. Another problem is tiredness. Some of the students came to the class obviously exhausted. A boy fell asleep in the beginning and nobody could wake him up. I left him to sleep and told the others not to disturb him. However, in the beginning he wrote his answers to the questionnaire and they were very clever.

My deep feeling is that Japanese high school students are overburdened and the level of stress is too high, which could seriously reflect their health in future. It makes no sense to go to school and sleep during the classes or force yourself to stay awake. Better to afford some rest in order to be in a good health and more productive. But still non-attending classes is regarded as a sin.
(Lyudmila Slavianska)

私が死と生を授業のテーマにしたのは、三年来ホスピスに関わってきたことによる。私はそれ以前は死にはあまり関心がなく、生きていることを当然と思い、いかに生きるかに関心があった。しかしホスピスに関わるなかで死と生について気付かされたことがいくつかあり、それを伝えてみたいと思った。自分が高校生のときを振り返ると、私は田舎の祖父が死んでも動揺するほどではなかったし、自分の死を想像しても身近な人の悲しみをリアルには想像できず、何も変わらないだろうと思っていた。死にまつわる体験や感じ方は人それぞれかもしれないが、高校生が死について学び、考えたり人と話し合う機会があってもよいのではないか。この授業では、まずホスピスについて紹介し、それから自分の死と生について少し考えてもらうことにした。

ホスピス紹介では、私はホスピスのロゴを刺繍した黄色いボランティア用エプロンを着て、写真を見せるために皆で机を合わせた。「何でエプロンしてるの?」「何するの? 心霊写真見るの?」と多少興味を引くことができた。気楽に、あまり深刻にならずに、ホスピスを紹介したいと思っていた。「ホスピス」という言葉を今まで聞いたことがあるか確認したところ、誰もないとのこと。「ホスピスとは終末期の人たちが最期の時間をよりよく過ごせるよう援助していこうという考え方やシステムのことです。」と一言説明して、私がホスピスに関わる成り行きを含め、合衆国の在宅ホスピスで研修した時の写真を見せて話した。「これは何をしてると思う?」「この人は何をする人?」と問いかけながら、エピソードも交えてホスピスを説明し、簡単なまとめのプリントも使って知識を押さえた。

さらに、日本のホスピスについても、私がボランティアをする東神戸病院ホスピスのパンフレットや写真を見せて説明した。しかし、十人が机を合わせると一枚の写真を一度に全員に見せることができず、一枚ずつ回覧していたところ、興味を失って写真を見ようとせずに寝たりしゃべったりする生徒たちが多くなってきた。写真が見にくいことは予想していたが、それでも今回は拡大コピーより生写真のリアリティーを期待して使ったのだったが。そのような生徒たちの様子に私も話をしづらくなり、私がホスピスで気付いたり感じることを話そうと思っていたがあまり話せなかった。例えば死を自分や周りの人にいつやって来るかわからないものとして意識するようになったことや、そうなったときにできるだけ後悔しないように周りの人に普段から自分の気持ちを伝え、良い関係を持とうとしていること、ホスピスではほとんど何もできなくなった人でも生きているだけで大切に思われること、そのように人が大切にされる社会は安心できること、日々の生活に敏感でありたいと思うこと。あまり話せなかったのは少し残念だったが、聞いてもらえないのだから仕方ない。何でも聞いてもらうのは無理だし、聞いてほしいなら聞いてもらえる態勢を作らなければならない。





私の小難しい感想を言うのはあきらめ、これまでのホスピスの話について質問を一つと、一番印象に残ったことをプリントに書いてもらった。すると、「ホスピスに来た人はみんな満ぞくしているのですか。」とホスピスケアを受ける人の気持ちを考えたり、「亡くなっていく人たちを見てかなしくなったりしないのですか？」とか、「大変ですか。」「仕事内容はどのようなものなのか?」「ホスピスの医師などはボランティアでやってるのかな。」とホスピスで働くことについて考えてくれた。「外面的なボランティアとちがうのか? みたい。内面的」とホスピスで働くことが労力の提供だけではなく、精神的な支援であり、ホスピスの理念に関与することではないのかと感付く問いもあった。「ホスピスってどういう意味??」とあらためての問いかけも。私は皆の机をまわりながら、質問に一つずつ答えていった。それぞれの問いかけをありがたく受け止め、賞賛しつつ、例えば「写真ではみんな楽しそうだけど、実際には患者さんや家族もスタッフも辛いことや大変なことが沢山あるの。でもね、だからこそ楽しむことを大切にしてるのよ。」と説明を加えることができた。

一番印象に残ったことには、「思いやりがないとできないしごとやと思った。」とか、「気持ちって大切だなあ・・・」とハートマークを描いたり、「二週間後にいった時にかん者さんがいなかったらさびしいだろうな ーって思った。」と書き、ホスピスを支える気持ちに反応していた。「生きてるってすばらしい」「人間はたすけあいなんだ!!」という言葉も、いくらか定型的ではあるが、この授業から出てきた言葉と思えば少し嬉しい。「ホスピスのパンフレットや写真を見て、特ように似てそう。設備も似てる。」と書いた生徒は、夏に学校から特別養護老人ホームにボランティアに行ったとのこと。「最期が近いからお酒やタバコも自由っていうのはすごいかも...。(フツの所だと体に悪いってとめられそう...。)」というも。これら二つの意見は、ホスピスが生活を支える場であると感じ取っている。「亡くなるまでの短い期間、快適に過ごしてもらうために頑張ることはとても良いことだと思う。もしこういう人が少ないのならどんどん増やしていくといいと思う。」との意見。さらに、「ホスピスの仕事そのものが哲学っぽく思った。人間は死に向かって生きてる。」人間は死に向かって生きていると、哲学者たちはしばしば言う。しかしこう書いた生徒は哲学史の知識に詳しいわけではない。どこかで聞いたことがふと思い浮かんだのだろうか。本質的なことが、本人もそれと明確に意識しないままにぼろぼろこぼされる。

皆の感想に感心しつつも、もう少しじっくり考えてもらうにはどうしたらいいだろうと思う。もっと時間をかけて学習することだろうか。生徒たちが自分の感想を表明し、それについて互いに理解を深めていくことだろうか。次の方策はまだはっきりしない。今回の授業では、私を通して「ホスピス」は生徒たちにはまだ遠いものに留まったと感じる。まあそれかもしれないけれど、でもどうしたらいいだろう。

(あいざわくにこ)